

「 生物季節の変化 」 (協同組合通信/ 日和見論弾) 平成 18 年 3 月 29 日

春分の日(3月21日)の21日、東京でもさくらの開花発表。平年より1週間早い。いよいよ楽しみな季節を迎えたが、一方で水戸の偕楽園では梅が満開。梅もサクラも同時に咲く妙な関東地方の春の訪れ。

植物や動物などの生物が暮らしの目安や社会経済活動に影響を与えるこの種の情報は、「生物季節」という。日々刻々と吹く風の方向や臭い、気温の微妙な変化が目にはさやかな季節の移り行く様を人々に示している。

さくらと言えばソメイヨシノ。各地の標本木(東京は靖国神社)を見つめる気象庁観測部職員の日も一段と輝く。開花予想の「早い」の意味は、例年よりも3日以上早いことを意味する。東京の平年値は3月28日、昨年の開花は3月31日。よって、今年は昨年より10日も早い。靖国の魂はどのように見守っているのだろうか？

最近の温暖化の進行は、身近な動植物にも異変をもたらし始めた。気になる記事が読売のトップに掲載された。「動植物の季節現象の変化」(1953~2004年、気象庁の調査)によれば、植物は開花が早まり、ウグイスやモンシロチョウの初鳴きや初見は遅れてきた。ちなみに、サクラの開花は4.2日、満開は4.3日早くなり、梅の開花は5.4日早くなっている。

身近な動物や昆虫の初見や初鳴きの遅れと気温の関係が明らかになってきた。異変の傾向と原因は、都市部の気温上昇をもたらすヒートアイランド現象の影響もあり、大都市の方が変化が大きいという。気温が高くなれば、初見や初鳴きは早くなりそうなものだが、現実には逆になっているという異変が各地で観測されている。俳句や短歌など日本人が好んで取り上げてきた、ウグイスの初鳴きは3.8日遅く、モンシロチョウの初見は6.8日遅くなっている。気象庁の推測では、数が減少すると、目につきにくくなるものの、動物の異変は、生息域の環境の変化が影響しているのだろうという。

ソメイヨシノの木の下で、花見酒に浮かれている人間に、昔から親しまれてきた動物や昆虫が身の回りから姿を消しつつあることに思いをいたすことができるのだろうか？春の日の夢幻ではすまされなくなってきた。

(気象情報システム株式会社 高 津 敏)